

## 「チュラロンコーン大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学工学部・地球工学科2回生 北尾亮太

タイに行く前はタイについては受験の時に習った知識や本で読んだ知識しかなく、『東南アジアの国で仏教国。今発展している国』くらいのイメージしかありませんでした。そのような国に僕が行こうと思ったのは異国の地に行き、言語が違う異国の人たちと触れ合うことで少しでも残るものがあり、今後の学生生活のプラスになれば良いと思ったからです。実際は思っていた以上のものを得て、様々なことを感じ経験することができました。その内容を字数の許す範囲でできるだけ詳しくわかりやすく書こうと思います。

タイでは現地の大学の学生と共同で日本のテーマについてプレゼンすることになっていました。その班分けは事前に日本でわかっており僕たちのグループでは『日本人の名前とタイ人の名前の違い』について発表することになっていました。そのプレゼンを作っていく中でタイの文化（今回は名前という切り口）について触れることはもちろん日本の文化（名前の歴史、日本人の名前に対する考え方など）にも改めて触れることができ、日本の文化と外国の文化の違いを改めて発見できたと思います。このことはとても重要だと思います。なぜなら、日本にいたとなかなか日本の文化や歴史などについて意識することはありませんが、異国の人たちと共通の話題について話し合い議論（共有）することで再発見できるからです。そのような経験はなかなかできません。また現地の遺跡や博物館にもいきました。そこでタイの歴史や文化を学びました。そこにはタイという国がどのようにできて今までどのような出来事があったのかを学ぶことができ、ここでも改めて日本との比較ができ日本のことについて再認識できた良い機会でした。

そして現地の学生はタイ語、英語はもちろんのこと日本語も使いこなしていました。彼らは三カ国語を使いこなしているのです。しかし様々な言語が使えるからといって必ずしも賢いとかすごいと言っている訳ではありません。ただ日本はともかく世界では母国語以外の言語（主に英語）が話せるということは普通であり、それができないと意思疎通もできないということなのです。逆に言うと英語が話せるならばそれだけいきなり世界が広がります。選択肢が広がります。日本にいと国際言語の英語を使わなくても支障はかなり少ないですが、一歩外にでると英語が使えることは普通であり、それができないということが異常であり意思疎通もできないのだと感じました。

今回の研修で、外国から見た日本のイメージや日本の置かれている立場などを少しではありましたが客観的に見ることもできたと思っています。これは日本からでて海外で研修したから（二週間という短い期間でも様々なことを得ることができました）こそできたことです。将来、国際機関で働きたいと思っている僕は、自国のこと（歴史、文化など）はもちろんのこと外国のそれも学び理解することができたことは非常に良かったです。そのような意味でも海外に留学や研修に行くことは今後とも自分にとって有意義なこととなるし、今後もこのような機会があればぜひ参加したいと考えています。ありがとうございました。